

相対的独立の認識

松 村 康 平



一

深い穴の中に、落ちていく。

どんなに声をたて、手をふり、足をバタつかせてみても、落ちていく速度を遅くすることはできない。落ちるのをとめることはできない。

自分の力ではこれ以上どうにもならない世界のあることに、気づく。それは、日常のチョットした出来事ひとつをとらえても、気づかれることである。

人間は自然を変革することができると、知っていても、自分は自然の力、物理的条件に規定され、その法則にしたがっている自分を、どこかで見いださざるを得ない。

人間のつくった機械であることを知っていても、その機械の動きにさからうことのできない自分を、見いだすのである。機械の前から離れても、「物」に規定されて、その法則にしたがってしかふるまうことのできない自分を、見いだすのである。

人間はまた、社会を変革することができると、知っていても、自分は社会の力・経済的条件に規定され、その法則にしたがっている自分を見いださざるを得ない。

人間はまた、自己を変革することができると知っていても、自分は身体状態、生理的条件に規定され、その法則にしたがっている自分を感じ、そういう自分を見いだす。

私は、だが、それらの、物理的条件、経済的条件、生理的条件などに規定されて、その法則にしたがってしか、ふるまえないのである。

ろうか。

私は、自分が、これらの条件に規定されている事実を、認めざるを得ない。私は、これらの客観的現実の規定されている。しかし、その現実から相対的に独立した世界の法則に規定されてふるまう自分を、私は見いだすことができる。

私が、心理学の研究を続け、心理学的研究に裏づけられた生活態度をとれるようになっていくからであろうか。

客観的現実から相対的に独立した世界が、開かれていることを、私は確認しており、その世界の法則に規定されてふるまう自分自身を、見いだす。しかも、この世界は、自分とその世界とのかかわり合い方によって、変化する世界である。常に変化してやまない可変的な世界である。そして、この変動をもたらずものが自分であり、また、この自分だけでなく、自分と関係的に存在する他者によって、変動される世界であることを、私は知っている。

この、客観的現実における法則とはことなる法則の科学的発見が可能な、客観的現実から相対的に独立している世界。この世界の変革は、客観的現実の変革を可能にする。

この世界があつて、人間による客観的現実の変革が可能であるといえるであろう。客観的現実の反映としてとらえることのできる世界であっても、その反映は、人間の活動（労働）を媒介としてなされる。そして、この活動にかんする法則的事実の解明が可能なのは、まさにこの世界においてである。この世界における法則的事実

に規定される活動を媒介としての、客観的現実の反映であり、変革である。

この世界が、客観的現実とかかわりあう、そこでの法則的事実の発見は、客観的現実の変革に必要であり、この発見のもたらず客観的現実の変革によって、相対的に独立しているこの世界の変革も可能になる。このことは、確然とした事実である。しかし、相対的に独立した世界での法則の発見が、この世界の変革をもたらずものとなることもまた、事実である。この事実も、しかも、科学的検証可能な経験的事実であり、私たちは平常、この事実の充滿した世界で、生活している。

このような認識に立つとき、物理的条件、経済的条件、生理的条件などに規定されても、それには規定しつくされない条件発見の可能性があるという認識が、新しく成立する。この認識に立つ活動の結果において、前述した条件に規定しつくされていると判断できるような事態に、立ちいたる可能性もある。けれど、その可能性がたとえ予測されても、それらの諸条件に規定しつくされない、変革可能な世界にあつての生活態度は、くずされることがない。それでこそ、この認識に立つことによって導かれる実践的態度である。

深い穴の中に、落ちていく。

そのとき、変革可能な世界の、認識と態度が、明確化していく。そこに、人間らしさをとらえる。人間らしい生き方を、そこに見い

だす。

あきらめて、落ちていくのではない。

思わず出す手に、木の枝をつかむのでもない。

変革可能な条件を、探し続けることにおいて、手が枝をつかみ、足も支えを、きぐりあてるのである。

保育において、あきらめることなく、変え得る条件をみつめて活動し続ける保育者は、この生き方に、共感するであろう。共感する人たちがいるなら、このように生きながら穴に死ぬ人も、なお生き続けることができるであろう。人間の営みの続く限り、人間らしい生き方と共に、その人が、関係的に生き続けると、いえるからである。そして、

このような人間らしい生き方をする人たちがひとりでもいる限り、その人と関係的に存在する他の人たちは、たとえ、そのような生き方を自覚していなくても、人間らしく生きる可能性を担って生きる。たとえ、かつてはそのように、自覚して生きた人が、なんらかの事情によってそのような生き方を、自覚してはすることができなくなっても、関係的に存在する他の人たちが、その関係の担い手として、人間らしく生きるならば、その人もまたそのように生きる可能性を担って、生き続けるといえよう。

二

八月のはじめであった。一九六三年の夏である。

日本を離れて四十日。(この間の事情は、その一部を、いまは休刊になっている雑誌「マザーズスクール」創刊社十月発行誌に「イスラエルの子ども」と題して写真と共に寄稿、また、お茶の水女子大学児童文化研究会誌に「転化現象—文化の形成過程—」と題して寄稿し、掲載された。これより前、帰国直後、雑誌「保育」編集部からのたつての依頼で、自由に書くことの許しを得て寄稿したが、これはいまだに掲載されていない。)

イスラエルには、一週間の滞在であった。

七月十日に羽田をたつて、ロンドンに立ち寄り、イタリアのミラノでの国際会議に出席した。集団心理療法の科学者会議で、これとほかに、二つの国際会議に参加するのが、主な目的であった。その一つが、イスラエルのテル・アビブで開催されるはずであった。これが変更になったが、予定した日数だけは、イスラエルにいた。それで、各地に歩をのばす機会がふえた。

テル・アビブに二日。砂漠の中を、バスで南の端までくだる一日二日の旅。北にのぼつて、ガリレア湖畔に一泊。ナザレからハイファに出て、テル・アビブにもどり、次の日は、東に、死海の近くエルサレムまで。ベツレヘムにも、旧約聖書に銘されている史蹟を、数多く、たずねることができた。

印象深く、いまでも鮮明に想い出されるのは、遠く続く砂漠の一角に、緑に繁げる樹木にとりこまれて、一群の家屋のみられる風景である。ゆきすぎた砂漠の果ての、また一角に、人の団結による力がつ

くりあげていく地域社会をみだせた。キブツと呼ばれる生活圏であつて、共産制が施行されている。そのキブツから出ることの自由もまた認められているところに、イスラエルの特色があるという。

五十年の歴史をもつこのキブツと、近代建築の立ちならぶ都市と、せまい路地に昔ながらの建物が密集している部落。このどこにも子どもたちはいて、その精神構造は、それぞれちがつてつくられるのではないかと、思われた。

この国のどこでも、しかしおとなたちは、この土地への愛着を根強くもっている。それは、千九百年ぶりの故郷の土地だからでもあらう。

外から内への軌道が、ハッキリと敷かれているなかで、すべてが育つかにみえた。外部からの思想も、文化財も、内部の発展をもたらすかたちでのみ、とりいれられていくかにみえた。

いまは、敵対的矛盾を発展の契機としてではなく、この国の内部における非敵対的矛盾の発展が、その繁栄をもたらすかにみえた。この場合、内部には見いだしにくい事実の発見が、遅れることなくなされていくためには、外から内への軌道にのつて、外部のものとりいれられていくことが必要であらう。そしてこの、外部のもの内部のものへの転化がさかんにおこなわれていて、転化の速度をはやめ、飛躍的な発展のもたらされることが、予見された。

このような「転化現象」が顕著にみられるところ。

奇蹟の建国がおこなわれたイスラエルの地。(村松剛著「ユダヤ人」中公新書、参照。)

そこには、「不滅の宗教集団」があつて、客観的現実から相対的に独立した世界の、顕著な展開がみられる。

政治的、経済的条件からの相対的独立(国連での建国への議決では、ソ連もアメリカも賛成し、イギリスは棄権。建国への戦いは、チェコ・スロハキアが支援している。国内における貧富の差は、差としての意義をもたぬほどに、国外との関係においても差をつくりだしていく。)

自然的条件からの相対的独立。(たとえば、キブツの出現はこれを実証している。)

(生理的条件からの相対的独立。(混血によって人種的偏見からの脱却が、可能となつている。))

この、相対的独立の「科学的認識」よりは、宗教的信念にもとづく実践的態度が、この地における繁栄をもたらしているともいえる。(一部では、宗教集団内の同族結婚によって、消滅への方向をたどるかにみえる現象や、アラブ諸国との葛藤に、繁栄の道がどのように拓かれていくか。予見の困難な条件はあるが、客観的現実から相対的に独立した世界の展開を、明確に認識することのできる歴史的事実を、イスラエルにおいて見いだせるのである。)